

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：14701
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2010～2014
 課題番号：22520434
 研究課題名(和文) コリマ・ユカギール語の統語構造と情報構造の関連究明による統語論記述の精緻化

 研究課題名(英文) Refinement of syntactic description of Kolyma Yukaghir by exploring the relationship between syntactic and information structure

 研究代表者
 遠藤 史 (ENDO, Fubito)

 和歌山大学・経済学部・教授

 研究者番号：20203672

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：東シベリアに話される古アジア諸語の1つ、コリマ・ユカギール語の統語論記述を、統語構造と情報構造の関連を詳しく調べることによって精緻化した。この言語のテキスト数点を電子コーパス化し、その形態論的・統語論的分析から得られた統語構造と、その談話論的分析から得られた情報構造とを対照することによって、文法のいくつかの側面について情報構造を考慮に入れた統語論記述を提案するとともに、談話論的分析から得られたこの言語のテキストの情報構造の基本的な性質を精査した。

研究成果の概要(英文)：The researcher of the research program explored the refinement of syntactic description of Kolyma Yukaghir, a genetically isolated language spoken in eastern Siberia, by examining the relationship between its syntactic structures and its information structures. By building and enlarging electronic corpus of the language, the researcher contrasted the syntactic structures gained by morphological and syntactic analysis with the information structures gained by discourse analysis. On the basis of these analyses, the researcher proposed alternatives to several aspects of the syntactic description of the language. The researcher also investigated basic characteristics of the information structure of the language on the basis of discourse analysis.

研究分野：言語学

キーワード：言語学 ユカギール語 統語構造 情報構造

1. 研究開始当初の背景

コリマ・ユカギール語には、情報構造上の概念である「焦点」(focus)が主語・目的語・定形動詞の上に形態論的に標示されうるといふ文法的特徴があることが旧ソ連の研究者 E. A. Krejnovich によって指摘されていた。この特徴は B. Comrie による旧ソ連の諸言語の類型論的概観の中でも、ユカギール語を特徴づける顕著なパラメータとして取り上げられた。また E. Maslova も 2003 年のユカギール語記述文法の中でこの特徴を重視し、研究代表者もまた現地調査に基づくコリマ・ユカギール語の体系的記述(2005 年)の中で、焦点という文法的特徴の重要性を確認した。

これらのことから、研究開始時において、コリマ・ユカギール語の文法記述(とりわけ形態論)における焦点の重要性そのものについては研究者間で認識が共有されていた。一方、焦点がこの言語で形態論的に顕著である現象であるゆえ、かえってその統語論的な記述については、研究代表者の記述を含めて、未だ言語事実の観察と整理のレベルに留まっていた。

これらの状況から、焦点という概念が情報構造の一環を成す概念であることを考慮するならば、コリマ・ユカギール語の記述においては、研究開始時における記述を包摂するより大きな枠組みを作り上げることによって、統語構造と情報構造の関連を体系的に考察することが望ましいと考えられた。この言語には、焦点の他に、基本語順からの逸脱や倒置・省略等の現象も多く認められること、また情報構造を反映した形態論的現象の存在も観察しうることなどから、文に反映される情報構造を明らかにするためには、焦点だけでなく、従来目を向けられてこなかった他の概念(旧情報、新情報、トピック等)にも目を向け、より広い記述的な枠組みのもとで、コリマ・ユカギール語の統語論の記述を精緻化する方向に研究計画を構成した。

2. 研究の目的

本研究では、上記の課題に体系的に取り組み、具体的には、コリマ・ユカギール語のテキストを分析し、精査することによって、次の5点を明らかにすることを目的とした。

(1)コリマ・ユカギール語のテキスト資料(既に収集したものを含み、可能な限り新たな資料の発見・収集に努める)を形態論的・統語論的に詳しく分析することによって、この言語の統語構造を体系的に考察するのに十分なデータを揃える。

(2)以上で揃えたデータを基にして、現地調査で得た資料に基づいて構築し得ているこの言語の統語論記述に関する基本的枠組み(研究代表者の 2005 年の著書)を批判的に検討し、可能な限りの改訂と精緻化を試みる。その上で、この言語のより詳細な統語論記述の枠組を作成する。

(3)上記(1)にあげたコリマ・ユカギール語の

テキスト資料を情報構造(焦点および他の情報構造の概念を含む)の観点から詳しく分析し、テキストに反映されている情報構造の基本的な性質を見出して、情報構造の観点から見たこの言語のテキストを記述する枠組みを作成する。

(4)上記の(1)および(3)を対照することによって、コリマ・ユカギール語における統語構造と情報構造の関連について、一般的な視点を見出す。

(5)上記(4)によって見出された視点から、コリマ・ユカギール語のより精緻化された統語論の記述の試案を作り上げる。

上記に概略を述べたような、統語構造と情報構造の関連に関する体系的なアプローチ、および情報構造を考察することによって統語構造を検討しなおそうとする試みは、コリマ・ユカギール語の研究の上で体系的になされたことがなかった。特に、焦点を除く様々な談話構造上の概念(たとえば旧情報、新情報、トピック等)を考察し、あるいは記述の中に導入する試みは不完全であった。本研究はこれらを初めて詳細かつ体系的に考察しようとするものであり、コリマ・ユカギール語の研究におけるその獨創性と特色はまずこの点にあった。また本研究は、研究代表者自身の収集した資料を含め具体的なデータに基づく記述研究であり、将来的には研究代表者がまとめることを計画しているコリマ・ユカギール語の大規模な記述文法作成の一環となるべきものでもある。

3. 研究の方法

研究の段階を前半と後半に二分し、研究計画の前半3年では主として統語構造の分析に、後半2年では主として情報構造の分析に取り組んだ。方法的に見て、特に重点的に取り組んだ領域は以下の3つである。

(1)コリマ・ユカギール語のテキスト資料がこの研究を推進する上で不可欠なデータとなるため、既に収集したものを含めて、可能な限り新たな資料の発見・収集に努める。それらをコンピュータ上で読める形式でコーパス化することを進める。その上で、それらテキスト資料を形態論的・統語論的に詳しく分析し、コリマ・ユカギール語の構造を体系的に考察するための準備を整える。その結果に基づいて、研究代表者自身のこの言語の統語論記述の基本的枠組みを批判的に検討し、改訂と精緻化を試みる。

(2)上記の形態論的・統語論的な分析と平行して、テキスト資料の談話論的な分析を進める。具体的に注目する点としては、テキスト資料の中で言及された指示物(referent)の談話内での生起、その指示物が初めて言及された場合と2回目以降の場合を比較対照することによる連関の究明、指示表現が省略される場合の同定と省略の要因の究明、それが言い換えを受ける場合の諸表現の生起などで

ある。合わせてテキスト資料における個々の文に現れた情報構造(旧情報、新情報、トピックなど)を同定する作業を行う。

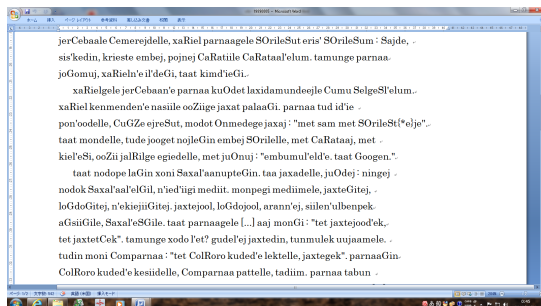
(3)上記の(1)および(2)の結果を比較対照し、より精緻化された統語論的記述の枠組みにおいて、コリマ・ユカギール語における統語構造と情報構造の相関について考察し、成果が出せる領域を選んで一般化を引き出す。可能であればさらに進んで、情報構造の概念を含んだ統語論的記述の可能性を探求する。

4. 研究成果

(1)コリマ・ユカギール語について、コンピュータ上で読める形式でのテキスト資料のコーパス化を研究計画期間全体を通じて進めた。その結果、概略次のような資料のコーパス化を完了させた。

研究代表者がこれまでの現地調査において収集に努めてきたコリマ・ユカギール語の文法に関する資料。特に重要な文法構造(形態論・統語論)に関する体系的な例文、複文構造に関する例文、指示に関する例文、指示転換に関する例文など。

新たにコーパス化した文献資料としては民話 60 篇ほどから成るテキスト集(話者は複数)、これとは別の母語話者の語りによる民話テキスト集、ならびに研究代表者の収集による母語話者による民話テキスト集(話者は1名)等がある。コーパスのごく一部を以下に示す。



これらのコーパスは、将来の様々な利用可能性を考慮し、一貫した変換方式に基づき、特殊なフォントを使用することなしに作成されている。これらのコーパスは本研究を進めるにあたって不可欠なデータとして機能したのみならず、今後のコリマ・ユカギール語の研究においても重要かつ有用なデータとなりうるものである。

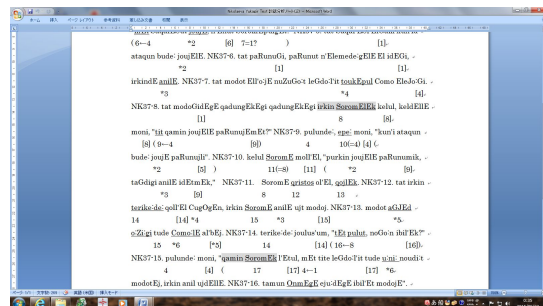
(2)上記のテキスト資料、加えてこれまでに収集しコーパス化してきた既存のテキスト資料の形態論的・統語論的分析を進め、これまでに研究代表者が概略を提示したコリマ・ユカギール語の文法記述の枠組みを再検討した。その結果、情報構造の概念を取り入れることによって記述を精緻化できると考えられる領域をいくつか確認することがで

きたので、それらについて順次研究発表を行い、さらに論文として発表した。

具体的に成果の得られた領域としては、名詞句と複合名詞の連続性が見られる領域(下記の雑誌論文と研究発表)、他動詞節の目的語の格標示において非常に複雑な標示の状況が見られる領域(雑誌論文および研究発表)、その状況を類型論的な視野から観察した場合に得られる一般化(雑誌論文と研究発表)等があげられる。これらの各領域においては、研究代表者の従来の記述では十分考慮することができなかった情報構造上の要因を取り入れることによって、コリマ・ユカギール語の形態論的・統語論的構造のいくつかの側面に更なる記述の精緻化をもたらすことができた。

また、本研究での検討から得られた知見を積極的に活用することによって、コリマ・ユカギール語の記述におけるいくつかの領域に関して再検討と見直しを行うことができた。それらの領域にはいわゆる「体言締め」構造(mermaid construction)(雑誌論文と研究発表)、節連続を伴う複文におけるモーダルの・発話行為的な制限(雑誌論文と研究発表)、動詞パラダイムにおけるゼロ記号の分布と特徴(雑誌論文)、動名詞の機能の検討を中心とした名詞化・名詞節の諸問題(研究発表)等がある。

(3)上記のテキスト資料等を談話論的な観点から分析し、指示表現の談話内での生起、その指示物の各生起において現われる指示表現とそれらの連関、省略される場合の要因、言い換えにおける指示表現等について検討を重ねた。合わせてテキスト資料における個々の文に現れた情報構造(旧情報、新情報、トピックなど)を可能な限り同定し、それらを意識しつつ分析を進めた。分析結果の一部を以下に示す。



この箇所に見られるように、指示物に応じて順次番号を振り(有生の指示物は無印、無生の指示物はアスタリスクによって区別)、同一の指示物には同じ番号を与え、指示物同士の連関も示すことによって、指示表現の談話内での生起と、それらが現れる際の形式を分

析している。このような作業を多くのテキストについて行い、それぞれの文の情報構造を明確にした上で、既に(2)で分析していた統語構造と比較対照することによって、コリマ・ユカギール語のテキストにおける情報構造と統語構造の関連に関する検討結果を蓄積した。

この検討の結果の一部は研究計画期間内に発表することができた(雑誌論文)。ただし細部の洗練も含めて全体をさらに成熟させる必要があることから、一般的な枠組みやより広範囲のデータの検討などを含めた研究結果を、さらに検討を重ね、今後出版予定の単著での著書において発表することを予定している。

(4) 本研究によって得られた成果が国内外でもたらしうるインパクトについては次のようにまとめることができる：

まず本研究が構築したコーパスは、コンピュータ上で処理できる電子的なデータの蓄積をもたらしたという点で、今後のコリマ・ユカギール語の研究の発展に向けて非常に有効なツールとして機能しうる。それは研究の発展のみならず、辞書や教科書等の作成のための基礎資料ともなりうる点において、現在消滅の危機に瀕しているコリマ・ユカギール語の復興に向けて、現地への還元という貢献もなしうるものである。原著者の了解や著作権処理といった諸問題をクリアすれば、将来これらのコーパスを国際的に共同利用し、更なる研究の発展に寄与することも可能になるであろう。

上記の「研究の目的」でも述べたように、統語構造と情報構造の関連に関する体系的なアプローチ、および情報構造を考察することによって統語構造を検討しなおそうとする試みは、コリマ・ユカギール語の研究の上で体系的になされたことがない。その点で本研究はこの言語における先駆的な試みであった。そのことからくる未整理の部分がまだ残されてはいることは認めざるを得ないが、本研究から得られた知見を他の研究者との間で今後とも議論することにより、同様の記述状況にある、他の北方諸言語の研究に新たな研究の分野を切り開く可能性があると考えられる。また一般言語学的な観点からは、統語構造と情報構造の関連が精力的に研究されている諸言語(たとえばハンガリー語や日本語等)の研究者との間で議論を重ねることにより、系統関係や地域を超えた一般言語学的な理論に貢献しうるような一般化につながることを期待できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

遠藤 史、強い対格と弱い対格 対格の類型論のための試論、英語学論説資料、第46号 第3分冊(語用論・文法・語彙・辞書)、632-642、2014、査読無(上記のリプリント)

遠藤 史、コリマ・ユカギール語における節連続の五段階について、和歌山大学経済学会研究年報、第18号、1-30、2014、査読無

Fubito Endo, Mermaid Construction in Kolyma Yukaghir, In: Tasaku Tsunoda (ed.) Adnominal Clauses and the 'Mermaid Construction' Grammaticalization of Nouns, NINJAL Collaborative Research Project Reports 13-01 (国立国語研究所), 613-628, 2013, 査読有

遠藤 史、コリマ・ユカギール語の統語構造と情報構造序説、Working Paper Series No. 13-03(和歌山大学経済学部)、1-41、2013、査読無

遠藤 史、ユカギール語の他動詞節における目的語の標示について、経済理論(和歌山大学経済学会)、第371号、1-18、2013、査読無

遠藤 史、コリマ・ユカギール語の複合名詞をめぐって、北方人文研究(北海道大学大学院文学研究科、北方研究教育センター)、第5号、141-157、2012、査読有

遠藤 史、強い対格と弱い対格 対格の類型論のための試論、経済理論(和歌山大学経済学会)、第366号、1-22、2012、査読無

遠藤 史、コリマ・ユカギール語の動詞パラダイムにおけるゼロ記号の特徴、和歌山大学経済学会研究年報、第14号、543-554、2010、査読無

〔学会発表〕(計5件)

遠藤 史、ユカギール語における名詞化・名詞節 コリマ・ユカギール語の動名詞の機能を中心に、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」研究会、国立国語研究所、2012年12月9日

遠藤 史、コリマ・ユカギール語の複合名詞をめぐって、池上二良先生追悼シンポジウム「北方言語研究のあゆみ」、北海道大学大学院文学研究科・北方研究教育センター、2011年12月17日

Fubito Endo, Five Levels in Kolyma Yukaghir: A Preliminary Study, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「節連続へのモデル的・発話行為的な制限に関する研究」研究会、国立国語研究所、2011年12月11日

遠藤 史、ユカギール語の他動詞節における目的語の標示について 類型論的視点からの考察、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「北方諸言語の類型論的比較研究」研究会、東京外国語大学本郷サテライト、2011年7月9日

Fubito Endo, Mermaid Construction in Kolyma Yukaghir, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「形容詞節と体言締め文：名詞の文法化」研究会、国立国語研究所、2011年4月23日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遠藤 史 (ENDO, Fubito)
和歌山大学・経済学部・教授
研究者番号: 20203672

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者